



沖縄キリスト教平和研究所

ニューズレター 第1号

ニューズレター発刊に当たり

「キリスト教平和研究所」誕生の経緯と狙い

大城 実

「国際的平和の島」建設を担える若者の教育を旗印にした本学の建学の精神からすると、創立 50 年後出発というのはあまりにも遅い気がする。しかし数年がかりの協議を経て、2009 年 10 月 30 日（宗教改革記念日前日）に開所の運びとなった。その背後には、1980 年来活躍してきた「沖縄キリスト教平和センター」からの促しと多額の財政的協力があつた。同センターは諸般の事情から活動を停止したが、日本政府の構造的沖縄差別の陰で米軍基地の影響をもろに受けているこの沖縄の地で平和を求め、キリストの平和の福音を人々に如何に伝えるかを課題とした団体であつた。

私たちはその趣旨を受け継ぐと共に、教学の場にあるものとして学問的に「平和学」を模索すると共に、この沖縄の地で「沖縄」に拘り、「キリスト」に拘り、「平和」に拘りつつその展開を求めたいと願っている。本学に職を共有する仲間だけでなく、学生の皆さん、諸教会の皆さん、そして沖縄社会に住む皆さんと共に、生きるとは何か、特に沖縄で生きるとは何か、平和とは何かを学び、その実現に少しでも役に立てる人間に育ちたいと願っている。幸いに新築となったシャローム会館の中に一室を与えられているので、所謂「研究」の場としてだけではなく、互いに触れ合い、学び合える場にしたい。気軽に立ち寄って交わりの場を広げて下さることを期待している。

神山繁實理事長より、金永秀教授に代わって所長を命じられ、2010 年 6 月から引き受けることにした。健康的に不安がないこともないが、全力を尽くしたいと思う。佐敷教会の金井創牧師がコーディネーターとして采配をふるって下さることになっているので安心している。このニューズレターも同牧師の考案によるものである。当面の作業としては 2010 年 2 月に始めた連続講座「戦後沖縄における教会の歩みと回顧-苦難の中での平和への願い」の継続とその出版、NCC と諸宗教団体の共催になる第 3 回九条アジア宗教者会議への取り組みなどを抱えている。

ニューズレターは、どの頻度になるかは知らないが、継続してお届けしたいと金井氏と相談しているところである。ご愛読(?) していただければ幸甚。何はともあれ、お支えお願いします。

(目次)

巻頭言

理事長メッセージ

研究所組織

活動

慈しみとまことは社会い
正義と平和は口づけし
まことは地から萌えいで
正義は天から注がれます。
(詩編 85:11-12)

研究所
〒903-0207
沖縄県中頭郡西原町字
翁長 777 番地
TEL.098-946-1279
FAX.098-946-1312
<http://www.ocjc.ac.jp>
E-mail:ocpi@ocjc.ac.jp

キリスト教平和研究所に期待すること

沖繩キリスト教学院 理事長
神山繁實

沖繩キリスト教学院は1957年に創設された。学院創設の目的は、精神的に、環境的に荒廃した戦後沖繩の復興を担う人材育成のため、現地の教会の長い祈りによって、先ずはキリスト教学科から始められた。一期生の卒業生は14名という小さな学校であったが、教える者、学ぶ者の目的意識が明確であったので、卒業時には全員がキリスト者になって社会に巣立っていった。

しかし、1970年には、応募者皆無の状況を考慮にいれ、廃科することになった。その後、社会的要請や必要性から、児童福祉科（現保育科）、英語科が更に強化され、それぞれ戦後復興を担う人材を育てて社会に送り出していった。本学院から巣立った卒業生は、1万1千人を超えるまでになった。その背後には、教会の人々の祈りと、同窓会、地域社会の大きな支援があって、今日を迎えている。

しかし本学院には、沖繩のキリスト教会から託された一つの課題が残されていた。本学院の設立母体である沖繩の教会のアイデンティティを聖書の教えと沖繩（琉球）の歴史的現実と文化に根ざした「平和を造りだす人材」を育てていく使命が、かつてのキリスト教学科の廃科後、ひとつの課題として残されていた。

本学院に設置された「沖繩キリスト教平和研究所」は、かつての「キリスト教学科」設立の課題を継ぐものであり、学院設立当時の目的を新たな視点から見直し、その働きを推進することが期待されているのである。従って、本研究所の名称である「沖繩」、「キリスト教」、「平和」研究所は、そのいずれの一点も外すことのできない方向性と内実を示すものである。この名称は、設立当初の建学の精神と教育目的を端的に示すものであるが、今日の状況の只中から問われ、更に深めていかなければならない大きなテーマである。

東アジアを中心とするアジア全体の平和を迫っていくことは、沖繩が戦争の危機を常に孕んでいる危険地帯であることの認識が必要である。この現実認識なしには、平和の構築も課題遂行も曖昧にならざるを得ない。日米安保・安全保障の問題は観念的ではなく、現実認識をしっかりと確立しつつ、他者と共存していく道を模索することが求められている。沖繩は、そのような平和の構築を模索していく有利な位置にあるといえる。

本研究所が沖繩の現実を直視しつつ、直面する課題を担い、その指針を示す働きを外部の研究所等と共に担いつつ協働していけることを強く望む次第である。

【活動・研究目標】

建学の精神を継承し、キリスト教に関する諸研究、及びキリスト教における平和学を研究し、地域社会と教会また学内に活かしてゆくことを主たる目標とする。

上記の目標のもと、研究所は2009年4月1日の研究所設置準備室開設を経て、2009年10月30日に開所した。

場所は沖繩キリスト教学院シャローム会館内。

【事業計画】

- ① 沖繩キリスト教学院の建学の精神に係る研究。
- ② 平和学の研究に関する事。
- ③ 上記研究の企画立案等に関する事。
- ④ 上記資料の収集、整理及び保管に関する事。
- ⑤ 上記研究の情報サービスに関する事。
- ⑥ 講演会及び講習会等に関する事。
- ⑦ 研究成果等の刊行に関する事。
- ⑧ 他の研究機関及び研究者との交流に関する事。

キリスト教平和研究所 組織

【所長】



大城 実
(沖縄キリスト教学院理事)

【コーディネーター】



金井 創
(日本キリスト教団・佐敷教会牧師)

【運営委員】



青野和彦
(沖縄キリスト教短期大学准教授)



内間清晴
(沖縄キリスト教短期大学教授)



金 永秀
(沖縄キリスト教学院大学教授)



前里光盛
(沖縄キリスト教短期大学教授)



吉濱幸子
(沖縄キリスト教学院宗教部主任)

【顧問】



神山繁實
(沖縄キリスト教学院理事長)

【研究員】



神谷武宏
(沖縄バプテスト連盟・普天間教会牧師)



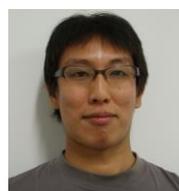
喜舎場勤子
(沖縄キリスト教短期大学准教授)



名護良健
(沖縄バプテスト連盟・中城城東教会牧師)



藤原 仰
(日本キリスト教団・宜野湾伝道所牧師)



古澤健太郎
(日本キリスト教団・コザ教会牧師)

【客員研究員】

鎌田 史
(沖縄キリスト教学院大学大学院生)

加藤哲平
(日本学術振興会特別研究員 DCI・同志社大学大学院生)

【これまでの活動】

○ 主催行事

連続講座 (2010年2月～2011年4月)
「戦後の沖縄における教会の歩みと回顧
～苦難の中での平和の願い～」

第1回 2010年2月23日

講師：平良 修

(日本キリスト教団沖縄教区教師、沖縄人権協会理事、
一坪反戦地主会共同代表、元沖縄キリスト教短期大学学長)

テーマ：戦争責任告白はキリスト教会史の分水嶺

第2回 2010年3月23日

講師：饒平名 長秀

(沖縄バプテスト連盟神愛教会牧師、沖縄宣教研究所
所長、沖縄キリスト教協議会議長)

テーマ：アジア・世界の破れ口に立って
～もはや「何事もなかったように」
宣教することはできない～

第3回 2010年4月20日

講師：仲村實明 (日本聖公会沖縄教区前主教)

テーマ：私の歩んだ道
～天皇教からキリスト教へ～

第4回は講師の健康上の理由により中止。

第5回 2010年6月22日

講師：金城重明

(日本キリスト教団沖縄教区隠退牧師、
元沖縄キリスト教短期大学学長)

テーマ：強制集団死から命の尊厳と真の平和を
求めて

第6回 2010年7月20日

講師：名嘉隆一

(日本キリスト教団沖縄教区隠退牧師、
児童擁護施設愛隣園理事長)

テーマ：教会はどこに立つのか
～基地の街の教会の歩みを通して～

第7回 2010年10月19日

講師：山里勝一 (日本キリスト教団沖縄教区隠退牧師)

テーマ：植民地の住人として



第8回 2010年11月16日

講師：仲尾次 清彦 (日本キリスト教団沖縄教区隠退牧師)

テーマ：平和の実現をめざしてハンスト・
佐藤総理の訪米反対

第9回 2010年12月14日

講師：城間 祥介

(沖縄バプテスト連盟宮古教会名誉牧師)
社会福祉法人鳳福祉会理事長 (小羊保育園)

テーマ：戦争と教会・戦後の宮古島伝道

第10回 2011年1月18日

講師：名護 良健 (沖縄バプテスト連盟中城城東教会牧師)

テーマ：教会は歴史を担えたか？

第11回 2011年2月22日

講師：中原 俊明

(日本基督教団志真志伝道所会員、琉球大学名誉教授)

テーマ：70余年を生かされて・
戦中戦後体験から拾う

第12回 2011年3月22日

講師：大城 実 (沖縄キリスト教平和研究所 所長)

テーマ：マボロシの『琉球教会』
～「原点」への回帰を求めて：何が「原
点」を見えなくしたか～

第13回 2011年4月19日

講師：神山繁實 (沖縄キリスト教学院理事長・学長)

テーマ：日本基督教団「沖縄教区」はどこから
どこへ

公開講座

心の健康管理

～聖書から見る医療カウンセリング入門～

講師：二神一人

(2009年度客員研究員、
日本キリスト教団良きサマリア人伝道所牧師)

期間：2010年3月12日～5月17日(全10回)

5月11日～21日 パレスチナ写真展と講演

講師：原 隆

(日本・パレスチナ プロジェクトセンター運営委員)

講演：存在することが抵抗すること

～いまパレスチナでは・・・～

《沖縄YWCAと共催》

特別研究員の招聘

イム・ボラ (韓国基督教長老会・香隣教会牧師)

2010年1月～5月、特別研究員として招聘した。

「辺野古を考える」上映会

2011年1月13日

藤本幸久監督制作の「One Shot One Kill」

上映と講演



(撮影：原隆氏)

フィールドワーク

学生と共に沖縄の歴史、沖縄戦、米軍基地の現状などを学び、学生が主体となって様々な発信をしていく。

2010年11月6日 読谷村「^{ほんのひ}恨之碑」

12月28日 南部戦跡

2011年2月25～26日 伊江島



6月25日 特別講演会

講師：アッシュ・ウールソン

(イラク帰還兵・反戦帰還兵の会会員)

講演：私が戦地で見た光景とは

《沖縄キリスト教学院、沖縄YWCAと共催》

7月1日 靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会

講演と協議

《反靖国沖縄キリスト者連絡会と共催》

10月24日 『沖縄キリスト教史料』
再販記念祝賀会

《沖縄キリスト教協議会と共催》

11月23日 歴史を学んで未来をつくる
フォーラム 2010

植民地主義とキリスト教

——「韓国強制併合100年」を覚えて、沖縄で
「日本による植民地支配」を考える——

講師：饒平名 長秀

(沖縄バプテスト連盟神愛教会牧師、沖縄宣教研究所所長、
沖縄キリスト教協議会議長)

パネリスト

李 清一 (在日韓国キリスト教会館館長、在日大韓基督教教会牧師)

知念ウシ (むぬかちやー 〈ライター〉)

○ 共催行事

2010年3月16日 講演と交流会

講師：イム・ボラ

(特別研究員、韓国基督教長老会・香隣教会牧師)

講演：韓国と沖縄・歴史と文化

《日本キリスト教団沖縄教区と共催》

川村シンリッ・エオリパック・アイヌ
(川村カトアイヌ記念館館長)

李 孟哲 (日本基督教団東京台湾教会牧師)

佐藤美和子 (東京都公立小学校音楽専科教員)

《沖縄宣教研究所・NCC 教育部と共催》

【沖縄宣教研究所による呼びかけ文より】

「植民地主義の過去と現在を考える場合、「沖縄」(琉球)のもつ意味は大きく深刻です。言い換えるなら、沖縄を理解することイコール植民地の過去と現在を現実具体的に認識し、理解することと言っても過言ではありません。植民地主義とは、人類史的・普遍的な克服すべき課題ですが、特に日本にとって、今、喫緊の総決算を迫られている歴史的宿題(負の遺産)です。

今、普天間基地がこじれにこじれ暗礁に乗り上げている感ですが、この問題は深く日本の植民地主義と関わりをもっており、その背景に薩摩の琉球侵略以来の400年(少なくとも近代帝国主義の「琉球処分」以来130年)の琉球に対する植民地支配があること、それが現在の過酷な(新)植民地主義に集結していることを日本人は知らなければなりません。その歴史的過程を明らかにすることは、同時にまた、他の植民地主義を強制され苦しんだ一苦しんでいる—アジアの諸民族の姿を浮き彫りにすることでもあります。日本人が真の自己認識を成し遂げ、人間性を取り戻していくため、この植民地主義の過去の罪責と向き合い、清算し、現在の(新)植民地主義(沖縄支配)と明確な決別を宣言して、新しい日本社会の形成へと向かうべきです。」

11月25日 九条アジア宗教者会議
沖縄事前協議会

本年10月に開催される同会議の沖縄事務局を研究所に置く。

《NCC その他宗教団体と共催》

11月27日 元「慰安婦」証言会・交流会

証言：日本軍「慰安婦」にされて

証言者：李 玉善

《沖縄キリスト教学院宗教部と共催》

12月3日 ガザ攻撃追悼講演会

講師：土井敏那(フリージャーナリスト)

講演：ガザ攻撃で何が起きたか

《沖縄YWCAと共催》

【ケビン・メア発言に対する見解と声明】

ケビン・メア元在沖総領事の差別発言が沖縄県民の怒りを煽った。米政府はあっさりメア氏を更迭したが、それはメア氏に罪を被せて、普天間の辺野古移設反対運動が加熱することを避けようとするものでしかない。そのことを白日の下に晒した米国の勇気ある学生たちに敬意を表し、感謝したい。

沖縄に存在する米軍基地は日米両政府による沖縄への不当な差別に根ざした政策だと考える。聖書はすべての人は神の形に創造されたという。人は全て平等に創られているとの主張である。ある特定の民族あるいは地域に民族的、文化的、地政学的な理由の故に誰も好まない政策を押し付けるのは明らかな差別であり理不尽である。危険な普天間基地の辺野古への移設強行は如何なる論理をもっても正当化され得るものではない。聖書の真理に悖るものであり、それは又私たちの先祖が描いた万国津梁の願いを覆すものである。

日米両政府は沖縄の基地は抑止力だという。逆に近隣諸国への脅威となる。私たちは先祖から譲り受けた大事な土地から発進した爆撃機や軍艦が地球上の如何なる地域においてもその住民を脅かし、破壊、殺戮することを黙視することを拒絶する。日米両政府の嘘とまやかしにもかかわらず、軍隊は平和をもたらさない。従って今回のまやかしを指摘し、軍事基地の撤去を主張し、隠蔽に強く抗議する。

(沖縄キリスト教平和研究所所員一同)